

戦後台湾の動物慰霊碑

——日本統治時代からの連続と断絶——

筆者は二年前の本紀要において、日本統治時代の台湾において設立された動物慰霊碑に関する基礎情報を整理する論文を執筆した。⁽¹⁾

本稿はその続編として、戦後、台湾人によって建立された動物慰霊碑について、その基礎的情報を整備しようとするものである。

筆者の問題意識について詳しくは前稿を参照していただきたいが、根本的な問いは、一般に日本独特の文化であるとされることの多い動物慰霊碑という存在が、なぜ台湾において残存したのか、という点にあった。この問いに対して、前稿での検討の結果、台湾における動物慰霊碑の存在は、必ずしも「残存」の一言だけで片付けられるものではなく、戦後廃れたものや、一旦倒されながら、その後復興されたものも存在することが明らかになった。したがって、台湾における動物慰霊碑に対する日本統治時代の持つ意味を考えるためには、戦前のそうした習慣がどのように戦後に接続されたのかを検討する必要がある。本稿で紹介するように、台湾には戦後新たに建築された動物慰霊碑が大量に存在するのであり、そうした新たに建築

真 辺 将 之

された碑が、いつ、どのような経緯で設立され、そして現在どのように扱われているのかを検討することが必要だということである。

しかし、前稿でも触れたように、台湾の動物慰霊碑については、台湾での研究も含めて、ほとんどまとまったものが存在しない。特に戦後の動物慰霊碑については、澎湖県における獣魂碑の祭拜のされ方を検討した呉金柱氏の研究⁽²⁾（宗教学の立場からするものであり、歴史的な経緯を検討したものではない）がほとんど唯一のものであり、それ以外の研究は皆無であり、どこにどの程度の碑が存在するかという情報もまとまって提示されることがない。日本において東アジアの慰霊碑を取り扱った唯一の研究といえるべき依田賢太郎氏の研究⁽³⁾においても、「台湾には台湾人が自ら建立したと考えられる動物慰霊碑のようなものはみられない」と記述されているような始末である。そこで本稿では、戦後、台湾に新たに設立された台湾の動物慰霊碑のうち、筆者が知り得たものについて、基礎情報を整備することを目的とする。なお、戦前に設立されて残存する慰霊碑は、

畜産関係施設、特に屠畜場がほとんどであったが、戦後のものは、屠畜場にとどまらず、より広い範囲に及ぶため、本稿ではその施設の種別ごとに節を立てて紹介していくこととしたい。

一 前稿記載情報の訂正・追加

戦後の慰霊碑の基礎情報の記述に入るまえに、前稿において紹介した情報に訂正および追加を要するものがいくつか見つかったため、最初にそれを記述しておきたい。

(一) 永靖獣魂碑の情報訂正

前稿で彰化県文化局のウェブサイトの情報に従って、日本統治時代のものとして紹介した獣魂碑が、戦後建て替えられたものであることが判明した。その経緯は次の通りである。二〇一八年六月、彰化県文化局は、永靖獣魂碑の取り壊しを決定、「獣霊」を民間習俗にのっとって彰化県肉品市場の獣魂碑に遷移合祀した上で取り壊すと告知した。これに対して日本統治時代の貴重な遺跡を壊すべきではないとの反対の意見が持ち上がった。反対運動側は、彰化県唯一の日本統治時代の獣魂碑であり、史跡として残すべきだと主張したが、これに対し、彰化県側は、地元の古老の話として、日本統治時代のものは民国八〇年代に壊され、現在のものは民国九〇年代に建てられたものであり、かつ屠殺場廃止後、長らく祭祀も行われていないため、残す価値は無いと反論した。⁽⁴⁾ それに対して、取り壊しに

反対する側がさらに調査した結果、一九九五年に刊行された張瑞和編『永靖郷土資料研究集』中に収められた写真にはすでにこの碑が写っており、民国九〇年代再建設は成り立たないこと、また、詹富棋氏の碩士（修士）論文『永靖街市空間的形成与発展之探討』には、一九六九年に改建されたとする記述があり、再建されたものだとし、⁽⁵⁾ ても日本統治時代からの連続性があるものであるから、やはり史跡として残すべきだと反論した。⁽⁶⁾

以上の議論を通じて、現存する碑が日本統治時代からのものではないことが判明したのであるが、筆者が考えるに、一九六九（民国五八年）に改建されたものは、現在のものではなく、別のものである可能性が高いと思われる。というのも、一九七六年に撮影された



画像 1 1976年に撮影された永靖獣魂碑

写真⁽⁸⁾（画像1、獸魂碑前で行われた葬儀の際の「弄楼」の儀式的写真とのことである⁽⁹⁾）を見ると、一九七六年時点で、現在と違う形態の獸魂碑が設置されていたことがわかり、しかもそれは形式的に日本統治時代のものにあまり見られない形式であるからである。おそらく日本統治時代に建設されたものが、一九六九年にこの画像のものに建て替えられ、それがさらに一九八〇～九〇年代（民国七〇～八〇年代）に現在のものに建て替えられたということなのではないかと思われる。なお彰化県は、二〇一八年六月一九日、道教風の民間習俗に基づき、「獸霊」遷移のための祭拜を行ったが、取り壊し自体はしばらく延期すると発表した。

（二）北港獸魂碑の追加情報

前稿において画像17として紹介した写真について、「戦後ほどない頃のものと思われる」と記述したが、その後これは一九四九年に撮影されたものと判明した。⁽¹⁰⁾

（三）嘉義獸魂碑の追加情報

前稿で紹介した嘉義市西湖公園に残存する獸魂碑を紹介した文中で、戦後移転した老藤里の嘉義市肉品市場に、二〇一六年、新たに獸魂碑が設立された旨を記載した。しかしその後の調査で、これは「新たに」設立されたのではなく、それ以前にも別の獸魂碑が設置されていたことが明らかになった。それ以前の獸魂碑がいつ設置されたものなのか正確な年代は不明だが、おそらくは西湖公園設置のものから、建て替えこそあれ、今日まで引き続いて設置され続けて



画像2-1 嘉義市肉品市場の現在の獸魂碑（2016年8月21日撮影）



画像2-2 嘉義肉品市場の先代の獣魂碑

いるものと考えられる。画像2-1は、二〇一六年に嘉義市肉品市場に設置された獣魂碑である。また画像2-2^①は、その先代の獣魂

碑である。

(四) 朴子獣魂碑の追加情報

前稿で、嘉義県朴子市に戦前設置された獣魂碑を紹介したが、これについても、移転後の嘉義県肉品市場に、これに代わる獣魂碑が建てられ、今日まで残っていることが判明した。画像3がそれである。建築年代は書かれていないが、一九八六年の移転時に設置されたものと思われる。現在でも農曆七月に中元普渡の祭拝を行っているとのことである。

(五) 屏東県肉品市場獣魂碑の新規情報

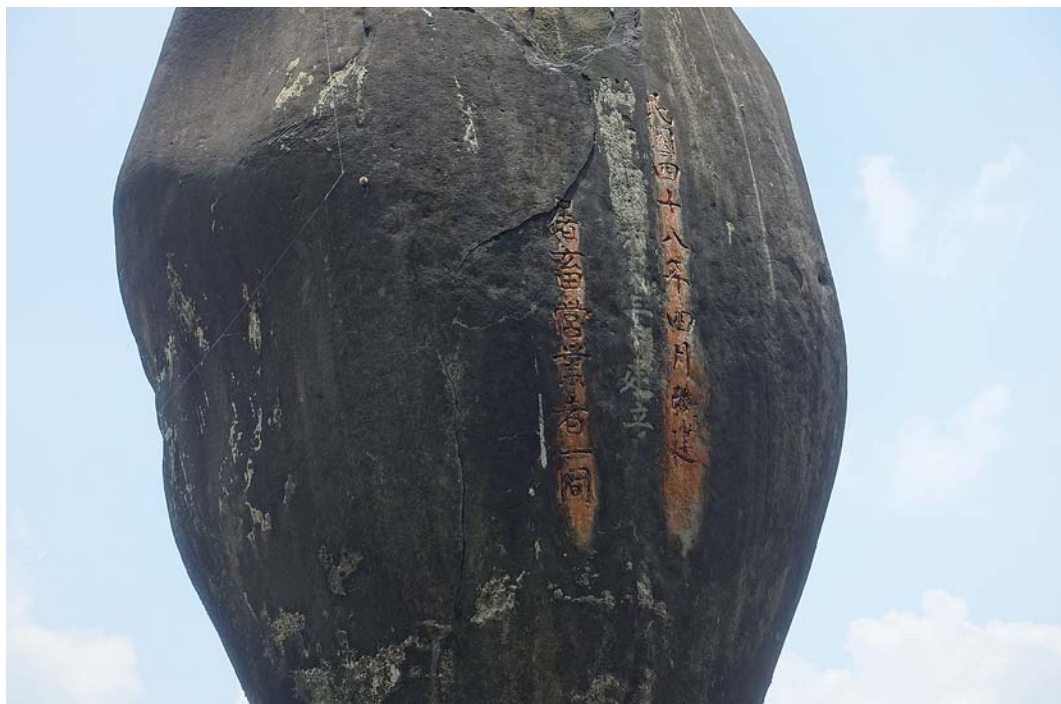
前稿の時点で残存が判明していなかった日本統治時代の碑文を一つ発見した。屏東県肉品市場に設置されている獣魂碑で、画像4-1がそれである。この碑の存在は同市場関係者はもちろん周知のことであろうが、ネット上を含めて外部にその存在が明らかにされるのは本稿がおそらく最初と思われる。この「獣魂碑」は、入口から一番奥、南側の川べりの箇所に設置されているのだが、裏面を見ると、画像4-2のように、「民国四十八年四月□建」とあり、□の部分は抹消されているものの、もともと「改」と彫られていたことがわかり、もともと「改建」であったものを後に抹消して「建」にしたものだとわかる。またその左側に文字列があり、よく見ると「昭和十□□三月建立」と書かれているのがわかる(□部分は判読不能)。つまり、昭和期にもともと設立されたものを、戦後に改建し、その後日本統治時代由来のものであることを抹消すべく、左の文字列と、



画像3 嘉義県肉品市場獣魂碑（2018年8月15日撮影）



画像4-1 屏東県肉品市場獣魂碑（2018年8月11日撮影）



画像4-2 屏東県肉品市場獣魂碑裏面（2018年8月11日撮影）

右の「改」の字を削ったものと考えられる。なお、『民声日報』一九四九年四月二四日と二五日の記事で、屏東県屠宰場の移転にともなって獣魂碑が新しく完成したとの記事が出ているが、そこには碑は新設であると書かれている。しかしおそらく土台を新築落成したという意味で、碑の本体は旧来からあるものを継続使用したのであろう。

（六）墾丁石符碑・牛羊集魂碑・籠仔埔土地公の情報訂正

前稿で、行政院農業委員会畜産試験場恒春分所に所在する「墾丁石符碑・牛羊集魂碑・籠仔埔土地公」を紹介したが、前稿で紹介したものは三つとも「墾丁石符碑」であることが判明した。筆者が訪問した際、日帰り調査で時間が無かったこともあって、三つの碑のうち、一つが石符の彫られた碑で、もう一つには「福德正神」と彫られていること（「福德正神」とは「土地公」の別名である）、もう一つは不鮮明でよく読めない碑面であったことから、所員にしっかりと確認することなくそれぞれを勝手に比定してしまったことが誤りの原因である。急いで調査して確認をとっていなかったことが気がかりで、今回再度訪問調査したところ、私の比定が全くのミスであったことが判明した。すなわち前回掲載した碑は三つとも「石符碑」と呼ばれているものであり、動物慰霊碑は別の箇所（敷地内北側の牛舎の傍ら）に存在することがわかった。画像5-1がそれであり、正しくは「牛羊魂集統碑」と彫られていた。ただし所員の方によれば「集魂碑」の呼び名も使われているとのことであった。設



画像 5-1 牛羊魂集統碑（2018年 8 月13日撮影）



画像 5-2 籠仔埔土地公（2018年 8 月12日撮影）

立は一九八九年であり、日本統治時代のもではなく、戦後のものとして扱うことが必要である。また「土地公」については、分所の敷地後方の道を南に約七キロほど行った草原のなかにあるもので、画像5-2がそれである。毎年農曆七月に所員が三か所を巡回して中元の祭拜を行うということである。前稿では、「石碑の形式は台湾の民間信仰の形式をとっている独特のものである」と紹介したが、それは動物慰霊碑ではなかったものであり、お詫びして訂正したい。また現世利益を願う要素が強いとも前稿で記したが、それは慰霊碑だけでなく、別の廟にまで詣でていることを考えれば、当然のことである。これについても訂正して取り消すこととしたい。なお、「石符碑」については、昔から存在する碑を一か所にまとめたもので、由来も含めてよくわかっていない、以前この土地に住んでいた人が祭拜していたものであろう、との所員の方の談であった。

二 肉品市場に戦後設置された動物慰霊碑

ここからは、本題の戦後台湾に設置された動物慰霊碑について、知り得た基礎情報をまとめていきたい。まずは、戦前・戦後を通じて最も多くの碑が設置されている肉品市場（屠畜場が設置されている）について紹介していきたい。

（一）新北市肉品市場畜魂碑

新北市樹林区に存在する新北市肉品市場に「畜魂碑」が存在する。

写真撮影を遠慮してほしいとのことであったため画像は掲載できないが、嘉義県肉品市場に設置されている碑と若干類似した、タイル張りの碑である。タイルの色は緑色であり、市場関係者に設置年代を聞いたところ、不明だが、自分が働き始めた際にはすでにあったので、少なくとも三〇年以上は前だという回答があった。かなり古いものではあるが、形態からして戦後のものと思われる。名前が「畜魂碑」であるのは、戦後のものとしては珍しいが、前稿の樹林肉品市場畜魂碑の項目でも若干言及したように、日本統治時代に淵源を有する、建て替えられた碑の可能性もある。

（二）新竹県家畜防治所の動物慰霊碑

入口入って左手、場内東側の壁際にある。画像6のように、鉄製の小さな円筒状の碑であり、碑には円筒を一周する形で「南無城隍爺爺」「南無如来活仏」「南無齊天大聖」「地藏王菩薩」「南無十方靈位」「南無舍利活仏」「南無勢至菩薩」「南無普賢菩薩」という文字が彫られており、また円筒上部には「卍」が彫られていて、道教と仏教の混淆した民間信仰の思想に基づくものであることがわかる。また碑には「獸魂碑」とは彫られていないが、メディア等ではそのように呼称されている。二〇一四年にこの碑を設置し、口蹄疫の予防のために殺された豚や鶏、さらに収容所不足のために殺された犬のために、その前で中元普渡の祭典を行うようになったのだという。その際、鶏の生血を儀式中で使用したこと、かえって動物虐待になるのではないかとの非難を受けることになった。これに対し



画像6 新竹県家畜防治所の動物慰霊碑（2016年8月8日撮影）

て防治所側は、鶏は血を採ったのみで殺してはいないと反論した。このような動物供犠を伴う儀式は、台湾の伝統的な動物供犠の習慣に基づくものだが、一般に動物慰霊の儀式で行われることは無く、珍しいものであるといえる。碑に「獣魂碑」と彫られずに前述のような文字が彫られているのも、日本の動物慰霊の文化よりも、台湾の民間信仰の系譜につながる部分が強いためと考えられる。⁽¹³⁾

(三) 台中市大安区肉品市場獣魂碑

画像7のものである。所内右手奥（南西方向）にある、設立年代は不明だが、さほど古くないものである。毎年農曆七月に魂碑前にたくさんのお米、クッキー、缶詰などの食品を備え、法師を呼んで中元普渡の祭行を行っている。⁽¹⁴⁾

(四) 彰化県肉品市場獣魂碑

一九八四年建設された獣魂碑が場内裏手（南方）にある（画像8）。碑の左右上端部に梵字のシールが貼られており、仏教の影響があるように見える。毎年農曆七月に中元普渡の祭行を行っているとのことである。

(五) 南投県農産運銷股份有限公司（旧南投県肉品市場）獣魂碑

入口入って右手（南西）に設置されているもの（画像9）。一八九三年に獣魂碑を設置。毎年中元節に、碑の前で盛大な普度法会を挙行し、関係する屠畜・売肉業者が一堂に会して祭行するという。その際には、「佛教六道輪廻」の観念に基づき、法師を迎えて、獣魂のために講経超度を行い、また、「焦面大士」を鎮座させて獣魂



画像7 台中市大安区肉品市場獸魂碑（2018年8月14日撮影）



画像8 彰化県肉品市場獸魂碑（2016年8月6日撮影）



画像9 南投県農産運銷股份有限公司獸魂碑（2016年8月6日撮影）

を普度するのだという。⁽¹⁵⁾

（六）雲林県肉品市場畜魂碑

場内入って右手奥（場内西北部）、トタン屋根の庇の下に「畜魂碑」が置かれている（画像10）。一九八八年秋の設置。戦後建てられた碑の多くが「獸魂碑」であるのに対し、これは「畜魂碑」の名称であることが注目される。碑の前方には狛犬が置かれている。毎月農曆初二、十六日には飼料を備えて再拝を行い、中元節には民間信仰の古札にのつった方式で、超渡会の祭祀を行っている。⁽¹⁶⁾

（七）台南市肉品市場獸魂碑

場内入り口右手（場内南方）の林の中に設置されている。一九九〇年設立のもので、画像11がそれである。裏面はタイル貼りになっている。従業員の話では毎年中元普渡の祭拜を行っているということである。

（八）台南市善化肉品市場獸魂碑

かつては台南県肉品市場という名前であったが、二〇一〇年の台南県の台南市への吸収にともない、ここも台南市経営となった。場内東北端、専用の屋根を整えらえたスペースに設置されている。名称は「獸魂碑」で、「魂」ではなく「靈」の文字が使用されている点が特色である（画像12）。一九八四年設立で、毎年中元普渡の祭拜を行っているとのことである。

（九）宜蘭県肉品市場畜魂碑

宜蘭県五結郷にある宜蘭県肉品市場の獸魂碑（画像13-1）。碑の



画像10 雲林県肉品市場畜魂碑（2016年7月23日撮影）



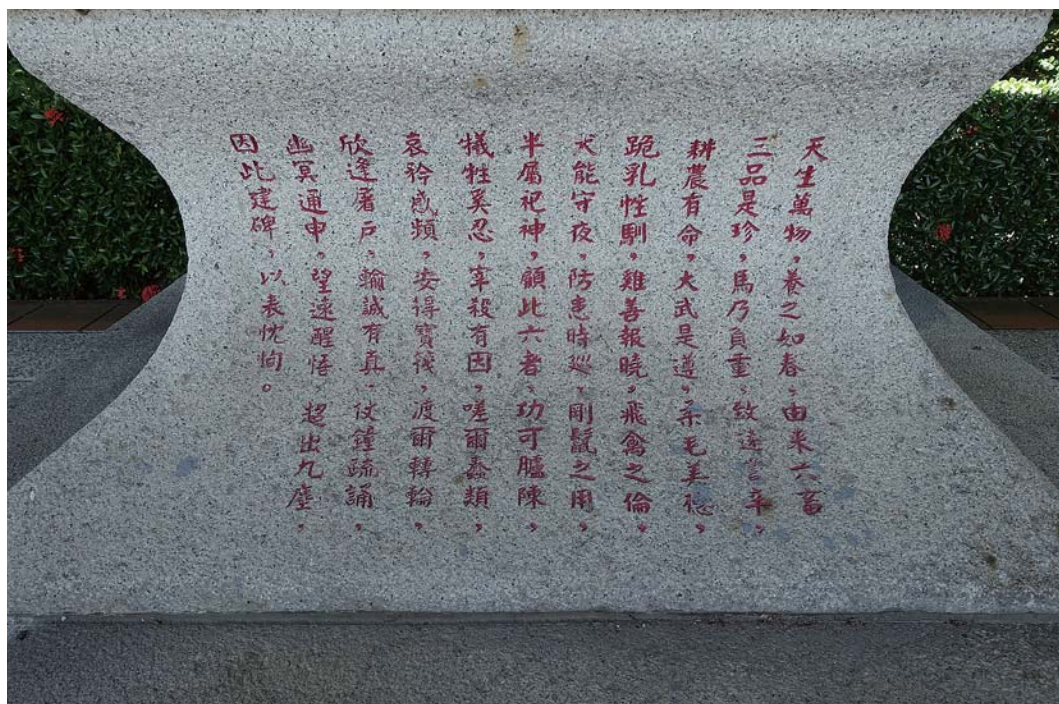
画像11 台南市肉品市場獸魂碑（2016年7月23日撮影）



画像12 台南市善化肉品市場獸靈碑（2016年7月23日撮影）



画像13-1 宜蘭県肉品市場畜魂碑（2017年7月15日撮影）



画像13-2 宜蘭縣肉品市場獸魂碑碑文（2017年7月15日撮影）



画像14 花蓮縣肉品市場獸魂碑（2017年1月2日撮影）



画像15 金門県肉品市場獣魂碑（2017年3月20日撮影）

下部には画像13・2のような碑文が彫られている。

（一〇）花蓮県肉品市場獣魂碑

画像14のもので、設立年代不明。従業員の方の話では、毎年三月末から四月頭にかけての清明節の時期に、仏教式の祭拝を行っているとのことである。他の碑の多くが中元に祭拝を行っているのに対して特異な事例である。しかしこれとは別に中元節も、所内の土地公廟を祀る形で行っているとのことであった。

（一一）金門県肉品市場獣魂碑

金門県中蘭にある金門県肉品市場にも獣魂碑が存在する。画像15のものである。もともと金門県は台湾島の一部ではなく、したがって日中戦争中に占領されていた時期を除けば日本統治下にはなかったのであるが、戦後台湾に本拠を置く中華民国政府の統治下に入ったことで、台湾に広く設置されている獣魂碑の風習も導入されたのである。設置は一九八四年で、毎年中元普渡の祭拝を行っているとのことである。⁽¹⁷⁾

三 衛生・防疫関係機関の動物慰霊碑

戦前台湾の動物慰霊碑のほとんどが、屠畜場に設置されていたものであるのに対し、先述したように、戦後の特色はそれ以外の機関にも動物慰霊碑が多く建てられるようになったことである。まず最初に、家畜等の衛生や防疫関係の行政機関や試験所等に設置された

ものを紹介する。

(一) 行政院農業委員会家畜衛生試験所犠牲動物紀念碑

本所は、日本統治時代の阿猴庁（現在の屏東県）に一九〇五年に設置された牛瘟血清作業所を前身とし、のち一九三一年に現在地である淡水に移転し、台湾総督府獣疫血清製造所に改組、さらに戦後幾度かの改組を経て、一九九九年に現在の名称になったものである。

本所には、入り口を入って右手（敷地内西寄り）に、一九五〇年に建設された「動物紀念碑」が存在する（画像16-1、2）。名称は「紀念碑」であるが、獣魂碑と変わらず慰霊碑としての機能を持っており、日常的に線香が供えられている。かつては毎年九月から一〇月にかけて仏教の僧侶を呼んで読経してもらうなど、盛大な儀式を行っていたが、一九九〇年代頃から果物と動物の飼料を備えて線香を焚き拝むのみの、より簡素な形式となった。二〇一八年には八月（農曆七月）の中元に儀式が行われるようになった。この祭拝の名称は、以前も現在も「犠牲動物慰霊祭」と呼ばれている⁽¹⁸⁾ことである。一九五〇年に碑が設置された際にはおそらく戦前から勤務していた人物が多数いたと思われるが、獣疫血清製造所では、一九二九年一二月に「畜魂祭」と称する慰霊祭を曹洞宗別院にて行った⁽¹⁹⁾との報道があり、一九三一年に現在地の淡水に移転してのちは、毎年所内で慰霊祭を一二月に挙行していた⁽²⁰⁾。戦後に造られた碑ではあるが、日本統治時代の動物慰霊の慣習の影響が強いものと考えられる。かつては仏教式で読経を行っていたというのも、日本統治時代



画像16-1 家畜衛生試験所犠牲動物紀念碑（2018年8月17日撮影）



画像16-2 家畜衛生試験所犠牲動物記念碑（拡大）（2018年8月17日撮影）

の慰霊祭のあり方と関係している可能性がある。

（二）台中市動物保護防疫処犠牲動物記念碑

ここに設置されている碑も「犠牲動物記念碑」という名称である（画像18）。おそらく前記家畜衛生試験所の碑の影響があると考えられる。碑は入口入ってすぐの駐車場右手にある。一九九八年八月一二日に落成式を挙行。実験等のために殺された動物のために、毎年農歴八月一日を「獣魂節」と定めて、祭祀を行っている⁽²¹⁾。

（三）嘉義県家畜疾病防治所獣魂碑

建物裏手（西側）の駐車スペース内に設置されている（画像19）。狆犬とガチョウが前にあることが特徴的である。碑の横に置かれた説明板によれば、もともと、前身の嘉義県家畜疾病診療所（家畜の診療と動物実験を行っていた）の時代に、ある職員の夢に動物が出



画像17 台中市動物保護防疫処犠牲動物記念碑（2018年8月14日撮影）



画像18 嘉義県家畜疾病防治所獣魂碑（2016年7月23日撮影）

てきて騒ぐことから、それを鎮めるために一つの「石頭」（「獣魂碑」と俗称されていたが、碑にそのように彫られてはいなかったようである）が置かれたことが端緒であるという。端緒が獣魂碑ではなく「石頭」であったこと（これは石敢当などとの連続性も想起させる）、しかしそれが一般に「獣魂碑」と俗称されたこと（つまりこの時点で動物の慰霊といえば獣魂碑という観念が一般に浸透していたということ）を示しており興味深い。以降農曆七月一二日に民間習俗の形式にのっとり牲札（動物供儀）を含む祭拜を行いはじめたこのことである。その後一九九一年に現在地に移転されたという。また案内板には記載されていないが、新聞報道によれば、碑は、一九九三年に改築、さらに二〇一〇年に現在の形となったようである。現在でも毎年農曆七月一二日に中元普渡の祭拜を行っており、疫病や災害等で多数の動物が亡くなった際にはその儀式を特に拡大して盛大に行っているようである。碑の前に設置されているガチョウの像は、二〇一四年に台湾初のH5N8型鳥インフルエンザにガチョウが感染した際に、そのガチョウを飼っていた業者が寄贈したものであるという。この年から翌年一月にかけて、嘉義県では六三万匹ものガチョウやアヒルを殺処分したため、二〇一五年には盛大な儀式を行った⁽²²⁾。またこれより先、二〇〇九年に台風で管轄内の牧畜場で一二三万頭の豚や牛が死に、また二〇一〇年には疫病のために一〇〇頭の羊を殺処分し、また四〇〇〇匹以上の捨て犬を殺処分せざるを得なかったため、二〇一〇年の七月には特別に拡大した中元普

渡の儀式を行った。⁽²³⁾

(四) 屏東県動物防疫所獸魂碑

所内左手奥、東側にある（画像19-1）。土台には一九九八年三月の日付の入った「黒白本一念間、畜道輪廻因果報、普化渡霊引魂進、明灯覺路西方行」という、当時の同所所長の文章が彫られているが、上部の獸魂碑とは素材も色も異なっており、土台のみが後から建てられたもので、碑はもともと古い時代のものであると考えられる。前述の土台の文章や、碑の頭に「卍」が彫られていることから、仏教の影響が強いように思われる。なお、碑の下部から後方にかけては画像19-2のように、「この下には伝染病の動物の死体が埋められているので三年間は掘り返すな」との注意書きが書かれたコンクリート板が多数埋め込まれていた。所員の方の話では、かなり昔のことだが、疫病等の実験に使用した小動物等を獸魂碑の下部から碑の後方にかけて、長きにわたって大量に埋めていた時期があったため、現在でもその場所が掘り返さず、上に施設も作らないように注意しているとのことだった。

(五) 花蓮県動物防疫所獸魂碑

二〇一一年に設置されたもの（画像20⁽²⁴⁾）。所員の談話によれば、毎年農曆七月に中元普渡の祭拝を行っているという（観覧を申し込んだものの拒絶されたため、直接筆者は見えていないが、碑が存在すること自体は確認を取ることができた）。



画像19-1 屏東県動物防疫所獸魂碑（2018年8月11日撮影）



画像19-2 「伝染病動物屍体掩埋処」と書かれた警告板（2018年8月11日撮影）

四 動物収容施設に設置された動物慰霊碑

ここでは捨て犬捨て猫などの遺棄・流浪動物を収容する施設に設置された動物慰霊碑を紹介する。なお台湾ではこうした保護施設と衛生・防疫施設とが併設されていることも多く、はっきりとは分割できないが、名称が動物保護に限定されているもの、および現場で実際に動物を収容している施設をここに分類した。

（一）台北市動物保護処犠牲動物記念碑

所内の奥まった箇所（南側）に設置されている（画像21）。碑の名前は「犠牲動物記念碑」であり、一九八二年七月の設立である。もともと一九七九年に動物解剖室が設置され、また殺処分された犬等の死体焼却施設が設置されたことがきっかけとなってこの碑が建



画像20 花蓮県動植物防疫所獣魂碑



画像21 台北市動物保護処犧牲動物紀念碑（2016年8月20日撮影）

てられたとのことである。動物実験に関与する医学系研究者が多数いること、また碑の名前が同一であることからして、おそらく淡水の家畜衛生試験所の同名の碑の影響で設立されたものであろう。

名前は「紀念碑」だが、毎年農曆七月の中元に對外開放して大規模な祭拜を行っている。その際には、ペット用品業者をはじめ、多くの業者から供え物が送られるようである。また日常的にも線香が立てられているようであり、機能的には慰霊碑と同等の機能を果たしている。なお、他の施設に勤務している人々も集まって、農曆中元の祭拜はここでまとめて行っているようであり、他の場所の施設で死んだ動物も対象に含めて慰霊を行っているようである。慰霊祭は動物園と同じく、財団法人地藏悲願基金会が取り仕切っているようである。⁽²⁵⁾

（二）桃園市新屋動物收容所獸魂碑

所内の南方向の隅に設置されている（画像22）。所員の方に尋ねたところ、碑文は二〇一四年に設置したものであり、毎年農曆七月に中元普渡の祭拜を行っているということであった。なお、同所では、二〇一六年に職員の簡稚澄氏が自殺するという事件があり、台湾社会で大きな話題となった。簡氏は台湾大学獣医系卒業のエリートで、公務員試験もトップの成績で通過するほどの秀才であった。動物好きで、捨て犬の面倒を見たいと自ら志願して動物收容施設に勤務することになったという。しかし、台湾では、收容後一二日経過後に安楽死処分をする規定となっていたことから、飼い主の見つ



画像22 桃園市新屋動物収容所獸魂碑（2016年8月9日撮影）

からなかった犬に対し、簡氏は毎週安楽死の処置をしなくてはならず、そのことに悩んでいたという。そのうえ、世間からはその安楽死について批判・罵倒されることも多く、そうした非難に耐え切れずに自殺に至ったとされている。⁽²⁶⁾ なお、その自殺の仕方は、犬を安楽死させる注射を自分にも打ったのだとして、各種メディアでセンセーショナルに取り上げられ、日本やイギリスをはじめ海外でも同様の報道のされ方をしたが、同所所員の話によれば、実際には睡眠薬を大量に飲んで浜辺に倒れているところを発見されたのであり、その報道は話題を引くために誇張された情報に過ぎないとのことである。

なお二〇一七年二月に、台湾では公的施設での安楽死処分を廃止する法律が通過した。その法令が成立するにあたっては、簡氏の死が大きなニュースとなり、台湾社会に議論を巻き起こしたことが一因となった。またそうした動きを受けて新屋収容所も二〇一七年に大幅拡張工事を行ったとのことであるが、筆者の訪問はそれ以前のため、獸魂碑の位置については変化があった可能性もあることを付言しておきたい。

(三) 台中市動物之家獸魂碑

台中市南屯区中台路にある台中市動物之家の敷地内東南部にあるもの（画像23）。以前は后里園区に設置されていたが、二〇一七年に后里園区が閉鎖になって以降現在地に遷された。設立年代は不明である。



画像23 台中市動物之家獸魂碑（2018年8月14日撮影）



画像24 台南湾裡動物之家獸魂碑（2016年7月23日撮影）

(四) 台南市灣裡動物之家獸魂碑

画像24のものである。設立年代は不明。一九九〇年に収容施設を現在地に遷して以降、特に祭拜儀式は行っていないが、二〇〇四年以降、台南市動物防疫所の所長以下関係者が出席して、中元普渡儀式を「獸魂碑」前に行うようになったとの記事がある⁽²⁷⁾。

(五) 高雄市動物保護処寿山動物保護教育園区獸魂碑

保護処の建物の北側正面に設置されている(画像25)。もともとは大中二路にあった高雄市観光保護局水肥処理廠内に一九八九年六月に設置され、二〇〇一年に寿山園区の設置に伴い現在地に移されたものであるという。碑の上部に卍が描かれ、また碑の前面に地藏王菩薩像が設置されている点に特色がある(菩薩像は二〇〇一年この地に碑が移設された際に設置されたものである)。また碑の下部には「蒼天有情創万物、衆生未悟造業苦、仏法有緣慈悲縁度、不再輪廻昇浄土」と彫られている。これらから、この碑は仏教の強い影響のもとに立てられていることが窺える。

なお、以下は未確認情報であるが、高雄県動物防疫処には一九六四年に設立された獸魂碑が存在し、再拝を行っていたという記事がある⁽²⁸⁾。またこの記事に書かれたものと設立年が異なる、高雄県動物保護処・動物防疫処が設立した碑の写真もネット上に出ている(画像26)。後者は碑文に梵字も彫られていたようであり、仏教色が強いようである。高雄県が高雄市に吸収された際に、前記両施設も高雄市の動物保護処に合併された。現在この碑がどうなっているのか



画像25 高雄市動物保護処寿山動物保護教育園区獸魂碑 (2016年7月22日撮影)

は未確認であり、今後の課題としたい。

(六) 花蓮県流浪犬中途之家獣魂碑

画像27のものである。二〇〇三年に設置されたもので、敷地内北端部付近にある。

五 動物葬祭奠苑に設置された獣魂碑

近年では、ペット霊園にも獣魂碑が設立されるようになっていく。ペット霊園は台湾でも近年広がりを見せており、以下の筆者が知り得たわずかな事例以外にも多くの碑が各地に設立されているのではないかと推察する。

(一) 慈愛寵物樂園（新北市）獣魂碑

画像28のもの。新北市土城三峽にあるペット葬祭奠苑である。仏

戦後台湾の動物慰霊碑



画像26 高雄県動物保護処・動物防疫処獣魂碑



画像27 花蓮県流浪犬中途之家獣魂碑（2017年1月2日撮影）



画像28 慈愛寵物樂園獸魂碑（2016年8月9日撮影）



画像29 康寧寵物樂園供養碑（2016年7月24日撮影）

教系の団体が運営しており、毎年中元に祭拝が行われ、獣魂碑前でも僧侶による読経が行われる。ただし園内にはキリスト教式の礼拝所も設置されている。

(二) 康寧寵物樂園団化集中奉安地

高雄市嘉誠里に位置し、愛玩動物の火葬場や墓地、納骨堂などがあり、墓地に「供養碑」が置かれている(画像29)。ペットの火葬には「団体火化」と「単独火化」とがあり、「団体火化」を選択した飼い主は、この碑を墓碑として祭拝するシステムになっているようである。碑の名前が「供養碑」なのは、この団体が仏教系団体であるためだと考えられる。ただし同団体の公式ホームページ上では、この碑は「獣魂碑」として紹介されている⁽³⁰⁾。

(三) 康寧寵物樂園楠梓仏堂

前項の団体が高雄市街で運営する仏堂。マンションの一角にあり、一階が受付、二回に仏堂がある。二回に仏像の絵が飾られ、人々がそれに祈っている。「碑」ではないが、動物供養施設として参考に掲げる。なお同団体は高雄市の岡山にも火葬場があり、そこにはキリスト教式の礼拝施設もあるということである。

六 大学に設置された動物慰霊碑

近年は動物実験施設を有する大学にも獣魂碑が設置されている。これも前節同様に、本節で紹介するのは筆者が知り得たわずかな



画像30 台中中興大学獣医学院獣魂碑 (2016年8月5日撮影)

事例であり、他にも存在する可能性が高い。

(一) 中興大学獣医学院獣魂碑

中興大学防疫疫大樓という建物の南東に設置されている(画像30)。二〇〇八年に建立され、以後毎年農曆七月一日に、民間信仰の形式にのっとり、果物や塾料(猫のトイレ砂のような、動物の糞便尿液等を吸い取るための衛生材)を供えて、実験動物の魂を弔っているという⁽³¹⁾。一般的に獣魂碑には動物の飼料を供えることが多いが、ここでは動物の糞尿を吸収する衛生材を供えているところが独特である。

(二) 屏東科技大学獣魂碑

獣医系の建物が多く集まる地帯の西側、動物の死体焼却施設の隣



画像31 屏東科技大学獣魂碑
(2018年8月11日撮影)

に設置されている(画像31)。一九九四年設立。碑の上部に卍が彫られており、また「蒼天有情創万物、衆生未悟造業苦、仏法有縁慈悲縁度、不再輪廻昇淨土」という、高雄の寿山動物保護教育園区獣魂碑と同じ文句が彫られており、影響を受けていると思われる、この碑も仏教の影響が強いのだろうと考えられる。

七 動物園に設置された動物慰霊碑

(一) 台北市立動物園生命紀念碑

台北市立動物園「生命紀念碑」が筆者の知る限り唯一のものである(ただしほかにも存在する可能性は否定できない)。同碑は園内中心付近の緑地に設置されている(画像32)。碑の前方の地面に説明板がはめ込まれているが、そこには、「生命会以各種不同的形態出現 可能是猩猩、是麻雀、是人、是蝶 ○動物園不隻是找尋快樂、探索知識 還要知道 地球的主人是地球上所有的生命 讓我們一同來礼讚生命 想一想 在我們分分秒秒流逝的生命裏 是否曾經 給過自己掌聲 給過他人溫暖 給過其他生命 一点疼惜 給過承載我們的地球 一絲絲的感恩」という文字が掘られており、単なる慰霊碑としての意味だけではなく、生命を礼賛し、自己のあり方を反省し、地球にたいする感謝の気持ちを持つきっかけにしたいという思想的意味が込められていることがわかる。また、碑のデザインについても説明があり、この碑が下部の鉄板トートムと、中心部の成長していく樹を



画像32 台北市立動物園生命紀念碑（2016年6月5日撮影）

かたどった二つの部分から成ることの意味が解説されている。鉄板のトータルにはこれまでに生まれてきた多種多様な生命を記念する意味が、樹にはこれから成長していく新しい生命を象徴する意味があらわされており、この二つが重なることで、過去の生命の積み重ねの上に現在・未来の生命があり、また万物は流転し、過去の生命が新しい生命となっていくのだという意味を込めているものだと思う。動物慰霊碑の多くが、碑の形態自体にあまり大きな意味を持たせていないのに対して、この碑は碑自体がモニュメントとして強いメッセージ性を持っている点で特異である。

なお、二〇一五年一月二六日、台中市の私立動物園である天馬牧場で飼われていたカバ「阿河」が、輸送中に荷台から落下して重傷を負うという事故が発生、事故の際の写真で、「阿河」が涙を流している写真が諸媒体で報道され、台湾社会の大きな注目を浴びることとなった。翌日、台中市農業局が救助・移送しようとした際、カバを吊るして持ち上げたロープが切れてしまい、再度カバが道路に叩き付けられるという事故が発生、二九日に「阿河」の死亡が確認された。この過程で、「阿河」がかつて、日本の漫画『イタズラなKiss』を原作とした台湾の人気ドラマ『悪作劇之吻』に出演していたということも判明し、台湾社会ではこのカバの扱われ方が劣悪だったのではないかという批判が巻き起こり、特に私立動物園の動物の境遇などについて、改善すべきだという意見が高まり、二〇一五年一月二三日に動物保護法が改正されるきっかけとなった。この

一連の過程が報道されるなかで、「阿河」は火葬後、台北動物園の「獸魂碑」に暫く置かれるとの記事を見た筆者は、台北動物園を訪問し、動物園の関係者に「獸魂碑」の所在を聞いたところ、「生命紀念碑」がそれに当たるが、しかし動物園ではこの碑を「獸魂碑」と呼んではないとの説明を受けた。ただし、新聞でこれが「獸魂碑」として報道されたというところには、台湾社会に動物の紀念碑・慰靈碑を示す名称として「獸魂碑」という言葉がかなり浸透していることを示すものという事が出来るだろう。

なお、台北市立動物園は、一九一四年に日本人が設立した円山動物園が発祥である。その翌年同園は官営動物園となった。同園では一九二四年から死亡した動物のための供養祭を行い始め、翌年一月一日には「動物愛護デー」として円山臨濟寺日曜学校の主催で、動物慰靈祭を大々的に行った。当初は毎年の行事ではなく、第二回は一九三〇年一月二三日に台北・基隆の仏教系日曜学校の主催で盛大に行われ、象の「マーちゃん」が動物代表で祭壇を拝むなどの行事も行われるなど、話題を読んだ。これ以降慰靈祭は毎年一月二三日の新嘗祭の日にあわせて固定行事となり、一九四二年まで合計一回の慰靈祭が行われた。⁽³³⁾ またその後、一九四三年以降、いわゆる猛獣処分が同園においても行われた。戦後ほどない時期には、これらの動物を慰霊する意味を込めて、木製の「斃死動物紀念碑」が建てられたようであり、碑前に飼料・酒・果物などが備えられている写真が残っている。⁽³⁴⁾ 前述した動物慰靈祭は戦後一九四八年に復

活し、この「斃死動物紀念碑」を中心に祭壇を組む形で一九五五年まで行われていた。象などの動物が祭壇を拝むパフォーマンスも継続して行われ、また慰靈祭と同時に「動物展覧会」と第する展示会が併せて行われていた。一九五五年より後に慰靈祭が行われなくなった理由は『台北市立動物園百年史』によればよくわからないが、⁽³⁵⁾ 展覧会の方も、慰靈祭が中止された一九五六に行われたのが最後であるとのことである。その後も内部人員による慰靈祭は毎年行われ、今日まで続いていることを考えると、慰靈祭と動物パフォーマンスを切り離してより集客にふさわしいパフォーマンスを実現しようという考えだったのではないかと思われる（この時期からその後の一九七〇年代までの動物園は娯楽施設としての意味合いが濃く、同園も動物によるパフォーマンスを最大の売りとしていた）。なお、かつて一月に行われていた祭拝は現在では農曆七月の中元（盂蘭盆会）に行われている。現在では祭拝は財団法人地藏悲願基金会という仏教系の団体が取り仕切っているようであるが、儀式は盂蘭盆会ではなく中元普渡と呼んでおり、道教・民間信仰とかなり混交しているようである（民間信仰において仏教と道教が混交しているのはこの祭拝だけではなく、台湾全体の特徴である）。⁽³⁷⁾

以上の経緯から明らかなように、今日存在する生命紀念碑は、二〇〇四年に、動物園の九〇周年を記念して作られたものであるが、戦前の慰靈祭に淵源を持ち、戦後建てられた「斃死動物紀念碑」の延長線上にあるものなのは間違いない。そしてそれを示すように、

筆者の訪問時には、碑の前面に、戦前からの動物慰霊祭の来歴を示す説明板が置かれていた。

八 食品関連私企業に設置された動物慰霊碑

(一) 雅勝冷凍食品股份有限公司畜魂碑

桃園市に所在する豚肉加工食品を製造する企業で、屠畜場を工場内に有する。筆者は現物未見であるが、「畜魂碑」という名称の碑が工場内に存在すること、戦後のものであることは、当該企業に確認済である。名称が「畜魂碑」であることは戦後のものとしては珍しいが、すぐ近くにある桃園市肉品市場の「畜魂碑」（前稿にて紹介済み）の影響があるのかもしれない。

(二) 洽富実業股份有限公司獸魂碑

台中市内にある鶏肉食品を製造している企業で西門前に碑が置かれている（画像33-1）。もともと会社オフィス正面入り口横にある画像33-2の左側の地蔵の後方に置かれていたが、二〇一七年から会社の西門に碑を遷したとのことである。地蔵と併せて設置されたところから考えて、仏教の影響が強いように思われる。その理由は、西門はトラックの出入り口になっており、鶏がそこから工場に入り、また製品として出ていく場所であるために、そちらの方が相応しいと考えたからであるという（以上、案内してくださった職員の方の談話による）。



画像33-1 洽富実業股份有限公司獸魂碑（2018年8月14日撮影）



画像33-2 洽富実業本社前のかつて獣魂碑が置かれていた場所



画像34 高雄獣霊塚

(三) 高雄市内の某私企業の獣霊塚
フェイスブック上で紹介されていた、高雄市内の私企業の工場内

に設置されているという慰霊碑である（画像34³⁸⁾。詳細は不明だが、碑面には「獸霊塚」と彫られており、「塚」の呼称を使っていることも含めて珍しい事例であり興味深い。なお肉品市場のような半ば公的な施設と異なり、私企業の場合はこのような碑が存在しても対外的に情報を公開することは少なく、外部に知られていない事例が他にも数多くあるのではないかと推察される。

九 そのほか関連する事例

（一）橋頭樹霊碑

高雄市北部の橋頭地区に、樹霊碑という名の、樹木の慰霊碑が存在する（画像35）。一九九五年当時まだ非常に立派な日本式校舎が残っていることで知られる仕隆国小の、その日式校舎の傍らにあった樹齢百年を超える老榕樹が枯れたことから、それを悼むために樹齡祭を開催、新たに榕樹を植樹するとともに、この碑を建てたのだという³⁹⁾。前稿で、阿里山に設置された「樹霊碑」を紹介したが、この碑は、碑文上に「是台湾第一次人類以平等態度、对待老樹死亡的感性祭典……顯示出对自然万物尊重的態度、頗具意義。」云々とあることから、それとは系譜的關係が無いようである。

（二）北港靈感祠

一九七一年五月に屠畜業者によって作られた道教の祠（画像36）。二〇〇四年に一旦改修されているようである。前稿で紹介したよう



画像35 橋頭樹霊碑（2016年7月24日撮影）



画像36 北港靈感祠（2016年9月19日撮影）

に、戦前北港には獣魂碑が設置されており、屠畜業者によって祭拜されていたが、戦後になってそれは廃止され、かわってこの廟が屠畜業者や食品業者の崇拝の対象となっている。北港鎮には朝天宮や武徳宮など、有名な道教の寺院が数多く存在し、宗教心の強い地域であると考えられる。おそらくそうした風土であることも、獣魂碑という慰霊碑の形態を棄てさせ、道教を中心とする民間信仰の形式に則った廟という形を選択することにつながったのではないかと考えられる。

おわりに

以上本稿では、戦後台湾で設置された動物慰霊碑についてその基礎情報を整備した。そのなかでいくつか気付いたことを指摘しておきたい。まず戦前の動物慰霊碑の多くが、屠畜場に設置されたものであったのに対し、現在は屠畜場以外にも大学、衛生・防疫試験所、ペット霊園など、多くの場所に設置されるようになってきている。

また、戦前は北部に「畜魂碑」、南部に「獣魂碑」が多いという特色があったが、戦後は「畜魂碑」は圧倒的に少なくなり、「獣魂碑」がほとんどになる。畜魂碑という名称が、家畜に限定したものであるのに対し、獣魂碑の場合は、ペットや動物園の動物、実験動物などを幅広く含む名称であることもその一因と考えられる。また動物園や実験施設では「記念碑」の呼称が使われていることも多い。

しかし実際の機能としては獣魂碑・慰霊碑となんら変わらない用いられ方をしている。このほか戦後の特色としては、南方に仏教の影響が見られる碑がやや多いという点が挙げられる。また、戦前に多かった自然石型の碑は、戦後のものには比較的少なく、戦前には見られない「卍」のマークが入った碑が見られる点も指摘できる。

祭拝については、ほとんどが農曆七月に祭拝を行っており、その多くが道教または仏教系（もしくは両者の混淆）の民間信仰にのっとった中元普渡の形式で行われている。仏教系の団体が儀式を取り仕切っていることもあるが、その場合でも「盂蘭盆会」という呼び方はなされず、「中元普渡」と呼ばれており、厳密な意味での仏教式というよりは、民間信仰の形式と呼んだ方が相応しいのではないかと考えられる。

なお各碑について、なるべく東西南北の方向を示すようにしたが、それは風水等の影響がみられるかどうかを考えるためである。結果として、方向に特に規則性は見られず、設置にあたって方角は重視されていないようである。しかしどの施設においても、敷地内の隅に置かれていることが多く、肉品市場では入り口から最も奥に置かれている例が多いようである。ただし入り口付近に置かれている場所もあるため、一概には言えない。

冒頭の問題意識、すなわち、日本統治時代における日本の動物慰霊文化の影響・残存という点については、戦前と戦後で、何が持続し、何が変化したのか、またなぜ変化しつつ、日本の動物慰霊の文

化が台湾で受け継がれたのか、ということをやより深く考える必要がある。そのためには、第一に、日本統治時代より以前の台湾の動物認識を探る必要がある。特に、特に台湾における供犠の儀式のあり方を検討する必要がある。本稿で扱った祭拝においても、ごく一部だが、そうした動物供犠の方法を採っている場所もあり、また獣魂碑での祭拝でこそ行っていないものの、同じ中元の祭拝において、所内の廟などへの祭拝の際には供犠を行なっている肉品市場なども存在するようである。また付言すると、こうした供犠用の豚の売買のために農曆中元に繁忙期となる肉品市場もあり、そうしたところでは獣魂碑の祭拝を農曆七月一日の中元から数日ずらして実行していたりする例もある。また台湾には、七將軍廟や十八王公廟、水牛將軍廟、義民廟の義犬將軍など、動物を祀る廟も存在する。そうした動物供犠や動物崇拝のあり方と、現在の動物慰霊碑のあり方の関係を検討したうえで、それが日本統治時代を挟んで、戦後にどのように変化していったのか、そのことが動物慰霊碑とどう関連しているかを、広いスパンで眺めていくことが必要である。

また外との対比も必要であろう。前項でもふれたように、漢民族が人口の多数を占める国・地域でありながら、歴史的文脈の相違から、中国と台湾とでは、日本統治時代の動物慰霊碑の扱われ方が対照的である。中国の動物慰霊碑についても、研究はほとんどなく、その基礎情報を整備しつつ、その背後にある動物観や歴史認識を探っていく、台湾のそれと比較検討する必要があるだろう。また筆

者はほとんど調査できていないが、韓国にも日本統治時代からの動物慰霊碑が多数残存し、また戦後新たに建てられたものが存在するという。それについても、台湾との比較で見えてくるものがあるのではないかと考える。今後の課題としたい。

注

- (1) 真辺将之「日本統治時代台湾の動物慰霊碑—畜魂碑・獣魂碑を中心に—」〔早稲田大学大学院文学研究科紀要〕六二、二〇一七年三月。
- (2) 呉金柱「台湾肉品市場為牲畜超渡儀式之研究—以澎湖島為例」（弘光大学宗教学系碩士論文、二〇一三年）。
- (3) 依田賢太郎「東アジアにおける動物慰霊碑をめぐる文化」（東海大学海洋学部紀要）一一・三、二〇一四年。
- (4) 彰化県文化局県政要聞「永靖「獸魂碑」祈福普渡活動說明」（二〇一八年六月一日發布）¹ https://www.chcg.gov.tw/ch/03news/01view.asp?bull_id=273088&kind=1（最終閲覧日二〇一八年六月二二日）。
- (5) 張瑞和編『永靖鄉土資料研究集』（彰化県永靖郷公所、一九九九年）一〇二頁。
- (6) 詹富棋『永靖街市空間的形成与發展之探討』（台北科技大学建築与都市設計研究所碩士論文、二〇〇八年）九二頁。なお記述の典拠は地元古老からの聞き取りとなっている。
- (7) Facebook ページ「文化資産報報」二〇一八年六月一日投稿、<https://www.facebook.com/959886997476804/photos/a.960857474046423/1118580854940750/?type=3&theater>（最終閲覧日二〇一八年一〇月二四日）。
- (8) 邱美都・楊銘欽『走読永靖街』（彰化県文化局、二〇〇九年）一四七頁に掲載。
- (9) 「拆獸魂碑是抹掉歷史印記的愚蠢行為」（『聯合報』二〇一八年六月一八

日記事、<https://udn.com/news/story/11091/3205333>）（最終閲覧日二〇一八年九月一八日）。

- (10) Facebook ページ「北港文化工作室」二〇一八年六月一八日投稿記事（<https://www.facebook.com/PeikangVC/photos/a.2512861282753957578248483245220494/1709928429075961/>）に442（最終閲覧日二〇一八年九月一八日）。
- (11) 石碇三濟宮Facebook ページ二〇一二年九月三日投稿（https://www.facebook.com/pg/3jiorg/photos/?tab=album&album_id=452690908108284）から引用。同ページには二〇一二年七月九日から二三日間、石碇三濟宮が祭祀を担当した際の画像が多数掲載されている。
- (12) 「屏建獸魂碑今落成礼」（『民声日報』一九四九年四月二四日）、「屏家畜市場昨落成典礼」（『民声日報』一九四九年四月二五日）。
- (13) 「蘋果即時」二〇一五年一月二〇日報道「家畜防治所渡靈魂 意用活鷄血祭」² <https://tw.appledaily.com/new/realtime/20151130/742744/>（最終閲覧日二〇一六年八月五日）。
- (14) 「台湾好新聞」二〇一六年八月一六日報道「農曆七月鬼門開 大安農會舉辦獸魂祭」³ <http://www.taiwanhotnet/?p=368002>（最終閲覧日二〇一六年八月二〇日）。
- (15) 「台湾好新聞」二〇一六年八月八日報道「<http://times.hinet.net/news/19181370>」（最終閲覧日二〇一六年八月二〇日）。
- (16) 「蘋果日報」二〇一四年八月一四日報道「中元普渡 雲林肉品市場超度畜魂」⁴ <https://tw.appledaily.com/new/realtime/20140810/449316/>（最終閲覧日二〇一六年六月二二日）。
- (17) ウェブサイト「金門碑碣詠跡」（http://www.kinmen-travel.org/digibook/2011stoneablet/chapter/chapter_02/section_05-03.html）の情報によ2（最終閲覧日二〇一六年五月一九日）。
- (18) 以上は同所ホームページ（<https://www.nvri.gov.tw/>）「最新公告」⁵ 一九九七年一月四日、二〇一七年九月六日、二〇一八年八月二六日投稿、

および筆者訪問時に案内してくださった所員の談話による。

- (19) 「畜魂祭」〔台湾日日新報〕一九二九年十二月二十九日。
- (20) 「血清製造所で慰霊祭」〔台湾日日新報〕一九三五年十二月二十二日。
- (21) 台中市清水区公所ホームページ「市政新聞」一九九八年八月二二日揭示
<http://www.qingshui.taichung.gov.tw/ct.asp?xItem=26963&ctNode=21798&mp=159010> (最終閲覧日二〇一八年八月一八日)。
- (22) 「中時電子報」二〇一五年六月一七日報道「撲殺六三万家禽 嘉東將擴大壁靈」
<http://www.chinatimes.com/newspapers/20150617000578260107> (最終閲覧日二〇一六年五月十三日)。
- (23) 「天眼日報」二〇一〇年八月二二日報道「農曆七月另類的祭拜儀式——慰霊祭」
<http://www.tynews.com.tw/news.php?action=show&id=37363> (最終閲覧日二〇一八年九月一七日)。
- (24) 黄家荣氏投稿画像 (<https://www.facebook.com/photo.php?fbid=10156488824775620&set=a.1015070354950820.458413769430819&type=3&permFage=1>) より引用 (最終閲覧日二〇一八年八月一八日)。
- (25) 台北市動物園ホームページ記事「展現人与動物和諧友善關係」二〇一八年八月二二日
https://www.zoo.gov.taipei/News_Content.aspx?n=AECD B443E299BD8&sms=72544237BBE4C5F6&s=21075F586F9A437A (最終閲覧日二〇一八年九月一七日)。
- (26) BBC NEWS ASIA “The vet who ‘euthanised’ herself in Taiwan” 2 February 2017. <http://www.bbc.com/news/world-asia-36573395> (最終閲覧日二〇一七年十二月四日)。
- (27) 「台南市動物之家 普渡猫狗亡魂」〔聯合報〕二〇〇四年八月二十四日記事。
- (28) 「自由時報」二〇〇五年八月一八日記事「動物好兄弟、獸魂碑普渡」。
- (29) 画像は Y. Tang 氏の Facebook ページ二〇一七年七月七日投稿 (<https://www.facebook.com/photo.php?fbid=1785284601498304&set=a.618884771471632.1073741825.100000503430387&type=3&permPage=1>) より引用 (最終閲覧日二〇一八年九月一八日)。
- (30) <http://www.kannin.com.tw/> (最終閲覧日二〇一八年九月一七日)。
- (31) 「國立中興大學教學大綱」https://onepiece.nchu.edu.tw/colsys/dlsq/Syllabus_main?y_strm=1041&v_class_nbr=1778 (最終閲覧日二〇一八年九月一七日)。
- (32) 例えば「蘋果日報」二〇一五年一月二二日記事「河馬「阿河」火化了 網友：阿河好走」
<https://tw.appledaily.com/news/realtime/20150121/546236> (最終閲覧日二〇一八年九月一七日)。
- (33) 「台北市立動物園百年史」(台北市立動物園 二〇一四年) 六七～六九頁。
- (34) 「台北市立動物園百年史」 八四～八五頁。
- (35) 「台北市立動物園百年史」 一一一頁。
- (36) 「台北市立動物園百年史」 一一三頁。
- (37) 台北市立動物園ホームページ記事「普渡・感恩往生動物的陪伴・教育」(二〇一一年九月一〇日) https://www.zoo.gov.taipei/News_Content.aspx?n=BD065B2FA7782989&sms=72544237BBE4C5F6&s=C7325BDBA98B682F# (最終閲覧日二〇一八年九月一七日)。
- (38) Facebook ページ「聖母大道」二〇一七年八月三〇日投稿 (<https://www.facebook.com/devout1684/photos/a.219802575071466/45046454338600/?type=3&theater>) より引用。
- (39) 「台灣時報」二〇〇九年六月一三日記事「百年老校大榕樹倒地 地方惋惜」
<http://www.twtimes.com.tw/index.php?page=news&id=50615> (最終閲覧日二〇一八年一〇月二四日)。